Ⅳ　社寺林の保全についての提言

Vorschläge über Erhaltung der Schrein- und Tempelwäldern

神奈川県下2,800余の社寺林の中で，ひかくてき樹林が良好な状態で残されている199の神社林，寺院林の現地踏査が行われた。全般的に考察すると寺院林，寺院緑地の方が面積もせまく，新しい人工施設づくりや，いわゆる管理のゆきすぎによって破壊，変形させられているものが多かった。

神社林の方は，まだ聖域意識が強く，低木層，草本層などの林床植生も含めて，よく保護されているところが多い。また神社林や神社緑地ともいえる境内も広いものが多い。したがって，最近の人手不足も手伝って放置されているため，かえって自然回復の途上にあるところも少くない。

神社林，寺院林などの県下の社寺林一般についていえることは，人の林内への立ち入りによる林床の破壊が進んでいることである。その原因としては，宗教的な聖域意識のうすれと都市化，開発による身近な緑の破滅による遊び場，散策の場の不足などがあげられる。

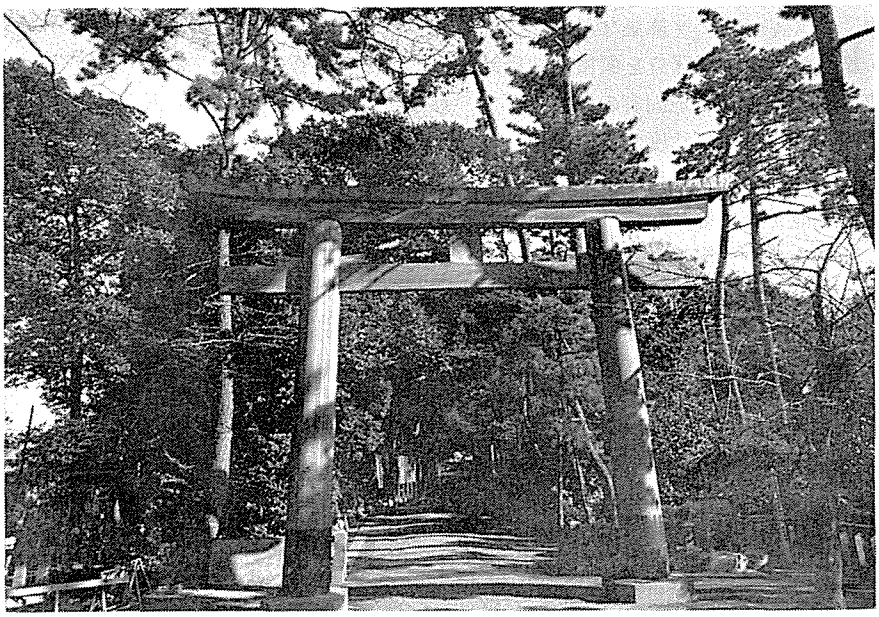
このまゝ無策の中に放置されると，長いものは数百年以上の時間をかけ日本人の伝統的英智によって残されてきた，しかも一度破壊された裸地に新しく形成するためには長い時間を必要とする，時間とともに，さらにきわめて多様の機能を果すことが期待される県民の最後の郷土の森も完全に消滅する危険性が強い。

神奈川県下各地の社寺林の植生調査結果から総合的に考察されることは，たしかに，その時代や好みに応じて，スギ，ヒノキ，アカマツ，クロマツなどの林業上有用な針葉樹の献木が生育しているところも少なくない。しかし，各社寺林の植生調査資料を群落組成表で比較すると，それぞれの立地の潜在自然植生の構成種群がほゞ完全に出現している。

すなわち，海岸近くではヤブコウジ—スダジイ群集，ホソバカナワラビ—スダジイ群集，イノデ—タブ群集の構成種群であるタブノキ，シロダモ，スダジイなどが生育している。また県央部，多摩丘陵などの関東ローム層の堆積の厚い台地上や斜面部などのシラカシ群集のケヤキ亜群集，典型亜群集，モミ亜群集域では，必ずシラカシの大木あるいは幼木が生育している。シラカシ群集ケヤキ亜群集域ではケヤキ，ミズキなどが生育している。さらに，大山，箱根の中腹までのようなウラジロガシ—アラカシ群落，シキミ—モミ群集域では，ウラジロガシ，アカガシ，モミなどが生育している。

したがって，神奈川県下の潜在自然植生の判定や潜在自然植生図化に際して，我々がまず最初に注目し，調査対象としたものも古くから残されている，あるいは存続してきた社寺林であった。

また最近の自然破壊，環境汚染さらには，開発や都市化による生物社会の貧化，自然の多様性の画一化が環境破壊の本質として，自然復元，緑豊かな積極的な環境創造の必要性が強く認識されはじめている。しかし，一度破壊された立地や表層土も，除去された産業立地や都市砂漠化したところへは，たとえ小さな社寺林程度の森であっても，生物社会のバランスのとれた，生態系として安定した生物界のシステムとして存続し得る樹林の復元にはきわめて膨大な費用を必要とする。さらにどれほどの経費と新しい技術を集中駆使しても，見かけ上の緑の復元はできても，本物のふるさとの森の形



Phot. 29　寒川神社の社叢にはクロマツ，スダジイが植樹されて，積極的に森林の形成がすすめられている。
Wald am Shinto Schrein Samukawa mit *Pinus thunbergii, Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* u. a.

成には，少くとも人間の一世代分以上の時間をかけなければ，その復元は困難である。

したがって，一見保守的に見えて，もっとも進歩的な自然環境や自然文化財の保全とは現存している，できるだけ自然度の高い森や樹林を残し，林床植生も回復させて必要に応じて，さらに自然度を高めるような前むきの管理をしてやることである。

古い日本の文化と伝統に支えられて，各地に残されており，このまま放置すれば破壊，消滅の危機に瀕している社寺林の科学的調査を基礎とした積極的な保護，復元こそ，新しい緑の環境創造の拠点であり，生きた模範例といえる。

神奈川県下各地，とくに古い文化の中心であった，またさらに現代都市の中枢部であり，その近郊である鎌倉，横浜，川崎をはじめ，くまなく残されている社寺林植生の現状が植生調査によってたしかめられた。

前回（1973年度）および今回（1974年度）の調査結果を基礎に，現在まで補足調査を続けながら，古くて新しい“ふるさとの森”としての社寺林の保護，積極的な復元について以下の提案がされる。

1）　従来の宗教的なタブーないしは聖域意識に加えるに，人間の持続的な生存環境の基盤，新しい文化を創造するための精神的潜在エネルギーの貯蔵庫としての郷土の森の存在価値と多様な機能を見なおし，新しい意識による社寺林の自然度の高い状態での保護施策を積極的に進める。

2）　寺院林，社寺林は，広さや自然度に持主および参拝者，利用者の希望も参考にしながら，保護・利用区分を決める。たとえば社寺の裏山，後背地，境内のまわりなどはできるだけ潜在自然植生に近い自然度の高い森林を残し，保護する。また必要に応じて復元してゆく。

他方，参拝路やそのまわりなどの利用空間は人の立ち入りによっても破壊されない，オニシバリ―コナラ群集，クヌギ―コナラ群集などの二次林やシバ草地などを，人の立ち入り，利用の程度にあわせて設定・維持する。利用区分を面積，地形，植生，参拝者の数と頻度などに応じて確立する。

社殿の裏山などをその土地固有の本物の郷土の森として，人の利用，立ち入りを規制して，絶対保護を優先する。この様な自然度の高い社寺林は，郷土の景観の中核として自然林を形成する。必要に応じて天然記念物などに指定して十分に保護する。そのまわりには常緑広葉樹を主とする多層群落の郷土林の保護機能を果させながら，市民にある程度の利用に供する，いわゆる雑木林などの緩衝緑地と，自由な立ち入り，利用を主とした利用域を設ける。少なくとも3帯に区分して，対象と目的に応じた社寺林および社寺緑地の保護と利用の共存・調和の区分けを行う。

3） とくに都市部に多い，過利用域の社寺林では，社殿，本殿裏などに必ず潜在自然植生に応じた本物の郷土林――社寺林―― を形成・存続させることが重ねて強調される。自然度の高い社寺林は，宗教的であると同時に科学的な緑の聖域として，人の不必要な立ち入り，利用を厳重に規制する。

聖域の自然林や，自然林形成地参道などに接するところでは花や果実のきれいな低木などを筋状に植え込み，マント群落，ソデ群落を形成して森林の保護と美観形成の両面の機能を果たさせる。

4） 近郊，農村部，山間部などで，最近管理されないで，いわゆる荒れている社寺林でも，それぞれの社寺林の面積，現状，将来の利用の可能性や計画に応じて，できるだけ広い面積の聖域を決定する。決められた社殿裏などの聖域には，それぞれの潜在自然植生に応じてシラカシ，アラカシ，アカガシ，スダジイ，タブノキ，ヤブツバキ，モチノキなどの将来郷土の森の中核となる樹種の種子（いわゆるドングリ）を播種するか，ポット苗などの幼木を密植する。

植えられた本命の樹種の幼苗以上の高さに雑草が生育する2～3年は必要に応じて草刈りなどの管理を時に行っても，4～5年以後は，できるだけ人手を加わえない。管理費は不用で時間と共に，ますます多様の機能を果させる多層構造の郷土林の形成を自然の復元力を主に進行させる。

5） すべての社寺林で，社寺林，境内，敷地のまわりに，ゆるすかぎりの幅で，積極的に境界環境保全林の形成を行う。我々の調査結果からいえることは，林縁のマント，ソデ群落と呼ばれる低木類や草本植物の密生により，森林の周辺保護組織が十分発達しているところでは，極端な場合は樹林帯の幅が2～3mでも安定して存続し得る見事な境界林が形成されている。

また新しく境界環境保全林を形成する場合には，できれば横浜の豊顕寺，京都の金閣寺のまわりの境内境界林のように土盛りして，マウンド上への樹林形成が，将来より多様な環境保全機能を果す。また土壌の排水を考慮しても，もっとも好しい。

何れの方法をとっても，“生きた構築材料”による“ふるさとの森”づくりにはきわめて長い時間を必要とする。今まで残されてきた世界に例を見ない数多くの貴重な県下の郷土の森――社寺林――が植生管理や植物社会学の基礎の上に，新しい時代に対応して，さらに新しい多様な機能を果さすため，必要に応じて復元し，将来にわたって存続されるように強く期待される。

お　わ　り　に

Schluß

社寺林こそ，日本固有の郷土林の中核である。また現代の都市，集落などの人間の生活域に残された“ふるさとの緑の自然”の最後の拠点である。長い住民の歴史と伝統に支えられ，日本人の精神活動の基盤であり，現代の多様な環境保全，災害防止の役割まで果たす社寺林が，最近の宗教意識の低下，さしあたりの機能主義によって急速に破壊，消滅の危機にさらされている。

神奈川県教育庁文化財保護課では全国に先がけて1973年度から県内 2,800 以上の全社寺林についての本格的な現地調査を行っている。本報は第 2 年度（1974年）の選ばれた 199 の全県下の社寺林の現地植生調査結果である。不十分な点も残されているが，現代における県下の代表的な社寺林の現地踏査による，植生学的な生きた Dokument（記録）である。

自然文化財の保護，675 万人以上の県民の心と命を明日に向かってまもり保証するための新しい県土づくりとこれからの県政にも十分本報が役立たせられるように期待される。